特集

このままでいいのか!? 防潮堤計画

今、東北の被災地をはじめ全国各地で、巨大な防潮堤の建設計画が進もうとしていることをご存知でしょうか？

防災対策が必要な一方で、巨大なコンクリート構造物に頼る方法で事業を進めてしまえば、地域の財産でもある自然環境を失うことになりかねません。沿岸の暮らしと自然環境の折り合いをどうつけていくのか、これからの地域の海辺の管理のあり方を考えます。

CONTENTS

2 **このままでいいのか!? 防潮堤計画**
防潮堤計画最前線は今／ココが問題！巨大防潮堤／防潮堤に頼らない海岸のまちづくり／市民が連携して取り組む沿岸管理／海を知るためにまず何をしたらいいのか／日本の沿岸管理のあり方を見直すために

14 **活動クローズアップ**
世界自然遺産小笠原のオーバーユース対策を進めています／嘉陽海岸の護岸工事、住民参加型の公共事業の大きな一歩に／木曽のヒノキ林に保護林をつくるための検討委員会の設置が決定／生物多様性を巡る世界の最新動向を調査／7月の参院選、あなたの投票で生物多様性の保全を目指す社会へ／福岡、兵庫、愛知、群馬開催の自然観察指導員講習会、参加者募集中／日本の保護地域の概要・現状・課題をまとめました／赤谷プロジェクト10周年・フィールドセミナー、森の調査会参加者募集／リスクマネジメント研修会（三重）開催します

18 **活動レポート**

23 **BOOK & PRESENT**

24 **読者の広場**
掲示板／お便り／次号予告・新入会員／ Nature Navi

30 **NEWSハイライト**
ミゾゴイの営巣木が「渓流保全」工事で伐採／カメはトカゲやヘビより鳥や恐竜に近い／わずかに残るアユモドキの生息地にスタジアム建設計画

32 **今日からはじめる自然観察**
カメの暮らしをのぞいてみよう

36 **シリーズ新・生命の輪**・43　椿　宜高
森の光と陰がはぐくむ生物多様性

今月の表紙
ニホンイシガメ

撮影・解説
松久保　晃作

丘陵地の細流で、甲長10cmほどのニホンイシガメと出会った。本種とはさまざまな場所で遭遇する。平地・山間の池や水田、川の中〜上流に多い。水場だけでなく、山道を歩いているところに出くわすこともある。子ガメは林縁の水たまりや細流に生える植物の陰にいるので、浅いからといってこういうところに踏み込むと軟弱な子ガメをつぶしてしまいかねず、調査時にも配慮したい。ともあれ、本種の生活史には、変化に富んだ環境が必要である。

東日本太平洋沿岸から砂浜が消える?!

東北3県だけで総延長約370km！

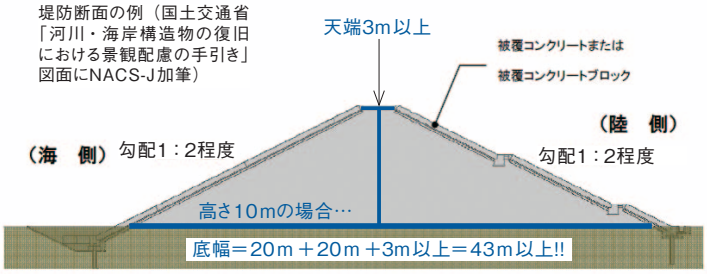
現在、青森県から千葉県の東日本太平洋沿岸で進む巨大防潮堤建設計画。その規模は、岩手、宮城、福島の東北3県だけで総延長約370km、約8200億円。高さは既存のものを大きく上回る10m前後で、高い場所では14mを超えている。東北3県の自然海浜は、現時点ですでに全体の7％にまで減少している※。残された自然海浜とどう付き合うか、住民合意を置き去りにしたまま、計画の一部はすでに着工されている。

※環境省平成24年度東北地方太平洋沿岸地域自然環境調査海岸調査よりNACS-Jが算出

防潮堤の形状は台形で、まるでコンクリートの山

防潮堤の復旧にあたり国から示されているのが、越流したとしても直ちに全壊しない「粘り強い構造」。天端（防潮堤のてっぺんの幅）の3m以上の確保や、壁面の勾配を緩くする、といった基本的な方針を示す。これに従った標準断面では、仮に高さが10mの場合、底幅は43m以上となり、砂浜を広く覆いつぶす。

堤防断面の例（国土交通省「河川・海岸構造物の復旧における景観配慮の手引き」図面にNACS-J加筆）



建設計画は日本全国にある！

「全国防災対策費」という予算をご存じだろうか。5年間で約19兆円を投じ東日本大震災からの復興を目指すものだが、このうち1兆円程度は被災地以外の防災・減災対策にも使用可能。また、「国土強靭化」を進める安倍政権が誕生させた2012年補正予算、2013年当初予算では、公共事業予算が増額され、議論のないまま新規事業に多額の予算がつけられた。さらに、今年5月に自民・公明両党から提出された「防災・減災等に資する国土強靭化基本法案」が成立すれば、全国を対象とした新規公共事業の根拠法がさらに増える。海岸や河口を埋める防潮堤計画は、決して被災地だけの話ではない。

静岡県浜松市遠州灘沿岸：総延長17.5km、高さ約13mの防潮堤建設計画が進行中。

徳島県那賀川左岸堤防地震・津波対策事業：河口から2.7km範囲で、堤防を7.8mにかさ上げ予定。河口に発達する希少種の生息する干潟は堤防の拡張によって消失する（右図）。

宮城県気仙沼市大谷海岸に建設予定の防潮堤の計画形状。高さ9.8m、土台幅は最大で約45mで海水浴場であった砂浜を覆い、海までせり出す構造となっている。（詳細は5ページ／写真：畠山 信）